# 咳喘息患者における咳嗽誘発因子の有用性の検討

金光　禎寛[1,2]，松本　久子[1]，小熊　　毅[1]，長崎　忠雄[1]，出原　裕美[1]，新実　彰男[2]，三嶋　理晃[1]
京都大学大学院医学部医学研究科　呼吸器内科学[1]
名古屋市立大学大学院医学研究科　呼吸器・免疫アレルギー内科学[2]

【背景】呼気一酸化窒素（FeNO）は好酸球性気道炎症を反映するバイオマーカーであり，喘息の診断に有用である。一方，咳喘息患者では喘息患者に比しFeNOが低値であるため，FeNO低値例における咳喘息の診断に有用な他の補助因子が必要である。
【目的】咳誘発因子が咳喘息の診断に有用であるかどうかを検討する。
【方法】2006年12月から2014年９月の間に京都大学医学部付属病院喘息・慢性咳嗽外来を受診し，FeNO測定と気道過敏性検査を受けた163名（平均年齢48.4歳，咳喘息患者104名）に対し，18の咳嗽誘発因子からなる質問票（Matsumoto H et al, *Allergol Int* 2012）を用いて咳嗽誘発因子を調査した。咳喘息診断におけるFeNOの感度特異度を同定し，FeNO高値群，低値群（＜ 22 ppb）に層別化して咳喘息患者における咳誘発因子の感度特異度を検討した。
【結果】咳喘息の診断におけるFeNOのカットオフ値を22ppbとしたとき，感度特異度はそれぞれ57%，61%であった。咳喘息患者は，非喘息性咳嗽患者に比し「冷気」，「会話」で咳嗽が誘発され，特にFeNO低値群でより咳嗽が誘発される患者の割合が高率であった。FeNO低値群での咳喘息診断における「冷気」または「会話」の感度特異度は60%，67%であった。FeNO低値例において，「冷気」，「会話」による咳嗽誘発群で気道過敏性の亢進を認めた。
【結語】「冷気」，「会話」は咳喘息の診断に有用な咳嗽誘発因子で，特にFeNO低値例の咳喘息診断に有用な可能性がある。